

研究経過報告

二 宮 克 美

1. 個人研究について

「児童の道徳的判断の発達」に関する内外の研究論文を、昨年に引き続き、整理しながら読んでいる。いずれ、これらの文献をまとめ展望したいと考えている。

—昨年、児童の道徳的判断の発達過程におけるGutkinの4段階が、Baldwin & Baldwin (1970)の「親切さ」の判断にもみられるのかについて検討を加えたが、ようやくその研究を英文「Developmental sequence in children's judgments of kindness」でまとめ終えたところである。

この他、最近Turiel (1983)の「社会的ルール」に関する研究に興味をもち、その検証の端緒として非常に初歩的な調査を実施した。その結果の概要は、10月中旬の日本心理学会第48回大会で、「小学生の社会的ルールに対する意識」と題して発表する予定である。

2. 共同研究について

久世敏雄教授を中心に進めてきた青年の社会的態度に

関する研究は、今新たな局面を迎えている。これまでの研究をまとめつつ、次の新たな研究をどのように進めていったらよいか真剣に論議している。これまでの研究の成果は、逐次本紀要に報告してきたが、今回は「青年期の社会的態度に関する縦断的研究：保守的態度、革新的態度に関する質的検討」としてまとめられている。なお、この論文以外にも2編の論文をまとめているところである。

この他、大学院生の宗方比佐子と共同でEisenberg-Berg (1979)の提起したプロソーシャルな道徳的判断について、保育園児から高校生までの幅広い年齢層で検討を加えた。この結果の概要は、9月下旬の日本教育心理学会第26回総会で発表する予定である。また、この研究の成果は「プロソーシャルな道徳的判断の発達」と題して論文のかたちにとまとめたところである。

(昭和59年8月31日記)

研究経過報告

村 上 隆

82年8月から84年7月までの経過について述べる。

1. 3相データの因子分析

昨年本紀要に発表した論文(“3相データにおける因子変化の記述のための諸方法(I)”)以降に実質的な進展はない。ただし、実際のデータへの適用の経験と、若干のシミュレーションの結果が蓄積された。いわゆる因子変化の探索的記述方法としては、まとめの段階にある。

この副産物として、変数が幾つかのブロックに分けられている場合、各ブロック毎の因子分析と、ブロック間の因子得点間相関とを同時に推定する、“多ブロック因子分析”とでも名づけられるような方法が生まれた。実際のデータへの適用の結果、かなり解釈の容易な結果が生み出されており、実用性はありそうである。

—昨年のこの項で予告したSD型データに適用可能なモデルについては、ずっと手つかずのままであったが、最近、大学院生廣岡秀一氏とともに着手した。多分一年

以内に何らかの成果を公表できると思う。

2. 敬語規範のモデル

これについては、LISP言語によるコンピュータ・シミュレーションを行なった。その内容は、“LISPとことば(II)—敬語規範のシミュレーション”(名古屋大学大型計算機センターニュース, 14, 451-468), 及び“敬語規範のコンピュータ・シミュレーション”(わが国における人間関係の比較的・総合的研究報告書)に発表した。モデルの改訂と、経験的データとの照合が今後の課題である。

3. 消費者行動の調査

昨年度、愛知県が経済企画庁の委託のもとに行なった“消費者の購買行動と物価情報に対するニーズに関する調査”に、愛知学院大学林英夫助教授とともに参加する機会を得、同報告書の約半分を執筆した。サンプリングに若干の問題があるとはいえ、このような大規模調査に